

# この本と私

読むことで、  
書くことで、  
気付く  
判る

## 「少年死刑囚」 中山義秀著

この本は、第2次大戦時に、九州での強盗殺人と放火の罪で死刑宣告を受けた17歳の少年の実際の行動を、手記という形で表したものです。少年は垂井浩という架空の人物として登場しています。垂井は、家庭の愛情に恵まれない環境で生まれ育ちました。その満たされない心が、彼を犯罪に走らせたと言われています。

浩の父は実母のすすめで娶った妻を嫌い、娼婦と再婚し、浩が生まれます。実母は浩の母を家に入れず、浩は母の顔も見ることなく育ちます。父は満州に蒸発。祖父母に育てられるも反抗し、空腹を満たすために盗みを重ねる始末。家出し、不憫を装って従兄弟夫婦の世話になっても盗癖はエスカレートし、従兄弟夫婦、祖父母をもナタで惨殺する。本人は罪意識など全くなく、死体を横に飯を炊く異常さをみせる。ついに警察に検挙され服役しますが、仮釈放となるや凶暴さがあらわれ、親切に接した行きずりの老婆に強盗殺人をはたらき、放火する。これほどまでに怒りを覚えて読んだ本はありませんでした。崩壊した家庭、戦時の混乱の下では、更正のチャンスがなかったという点で、彼も犠牲者なのかもしれません。

再び逮捕され、死刑の判決を受けますが、ここで教務官や僧侶から人としてのあり方を諭され、「喜んで死を受け、生まれ変われます」と改心。行いが模範生として、無期懲役に減刑されます。ところが喜ぶどころか再び悪の権化となります。浩にとっては死が望みだったのです。若い浩にとって、恩赦は救いだったのか否か、判決の難しさを考えさせられました。

F・M・

インパクト出版会

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞